

第二講 講義の目的

ヨーロッパの知的伝統に組み込まれたペルシア戦争

アテナイによる栄光と記憶の独占

スパルタの記憶（例 テルモピュライのレオニダス）

イスタンブールにある戦勝記念の標柱・・・31のポリスを記す

ペルシアの沈黙→記憶の偏在→歴史構築の困難さをもたらす

ギリシア人によるペルシア戦争の構想（トゥキュディデス）

二度の戦い

何故ペルシア戦争が注目されるのか

ギリシア史・ペルシア史の転換点に位置しているため

ペルシアはキューロス以来の対外遠征と征服から防衛と外交に転換

ギリシアはスパルタ中心からスパルタ・アテナイの二極構造に移行

ペルシア戦争についての語りの特徴

正しい戦争・・・プロパガンダとして作られ宣伝

ギリシア人のヒロイズム・・・テルモピュライでのスパルタ兵の自己

犠牲・サラミスでのテミストクレスの知略・プラタイアでのパウ

サニアスの冷静

対称としてのペルシア

「柔弱」・「臆病」・「傲慢」なペルシア人

オリエンタリズムの起源

正しい戦争のキーワードとしての「自由」

例：『テミストクレスの決議碑文』（Meiggs/Lewis, 48, 15）・ヘロ

ドトスの評価（Hdt. 7. 139）

本講の目的

ペルシア戦争の再評価

バルバロイ蔑視観の起源・・・イオニアの反乱

近代歴史学の問題・・・近代の産物である「民族」を古代に投影

ヘレネス対バルバロイという二項対立では説明できない

「解放」という観念は同時代のギリシア人の間では限定的な広がりし

か見えない

研究の状況

Balcer, Georges, Mary, Kienast, Walser, 阿部、中井、馬場、師尾な
ど